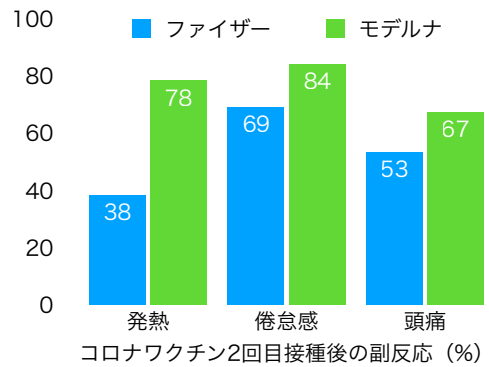


デルタ株にワクチンは効くのでしょうか

ワクチン接種後の副反応にどう対処されているのでしょうか

東京ではコロナの重症患者が増え、救急搬送先が見つからない状況に陥っています。受け入れ病床の確保とともにワクチン接種をさらに急ぐことが尊い命を救うこととなります。厚生労働省のワクチンの副反応を調査している研究班から、ファイザーとモデルナのワクチンの状況について報告されています（伊藤澄信ら 2021）。モデルナは、自衛隊員約2,500人の対象から、2回目の接種翌日に発熱（37.5度以上）した人が78%（1回目7%）、2日後が20%、3日後にはほぼ全員が解熱したとの結果が示されています。倦怠感84%（同26%）、頭痛67%（同17%）、接種部の痛みは88%（同86%）に認められました。接種翌日に休業した人は39%（同3%）、2日後も休業した人が10%でした。これらの結果から、少なくとも2回目の接種の翌日は勤務の予定を入れない対応が求められます。



ワクチンを接種しても感染するのでしょうか

デルタ株はそれ以前の変異株の2倍の感染力を持っています。デルタ株に対してはワクチンの効果がやや弱く、ワクチンを接種していても感染する可能性があります。ブレイクスルー感染と呼ばれます。米国のメイヨークリニックなどの研究グループが公表した査読前の論文によれば、デルタ株が拡大した2021年7月の7万7000人の対象から、入院に至るのを防ぐ効果がファイザーのワクチンで75%、モデルナのワクチンで81%といずれも高い水準を維持したとの結果が得られています（Puranik et al. 2021）。これらの結果は、少なくともワクチンが重症化の予防に役立つことを示しています。

ワクチンを接種しても他の人を感染させる可能性はあるのでしょうか。

まだ結論は出ていないようです。デルタ株は他の変異株より、ウイルス負荷が高いと考えられています。ウイルス負荷とは鼻や喉にどのくらいウイルス粒子があるかの目安です。気道のウイルス粒子が多いほど飛沫やエアロゾルで他の人を感染させやすくなります。ワクチンを接種した人が感染した場合、接種していない人よりウイルス負荷が高い期間が短いとの報告があります。このことから、ワクチンが他の人を感染させにくくする可能性があります。ワクチンがデルタ株の拡大の抑制に果たす役割についてはこれからの検討を要することと思われます。

3回目の追加の接種を受ける必要はあるのでしょうか

ワクチンの効果はしだいに弱まっていくことから、6か月から12か月後には追加接種が必要になるとされています。追加接種はブースター接種と呼ばれています。ここで、免疫反応には二つの段階があります。最初は自然免疫で、病原体や異物を破壊する反応をすぐに引き起こします。次は獲得免疫で、特定の病原体から長期間に渡って体を守る抗体を作ります。抗体は時間の経過とともに少なくなります。獲得免疫により時間が経ってからも同じウイルスや細菌に遭遇した際に抗体をすぐに作ることができます。ワクチンを接種していない人たちがいるなかで、一部の人に追加接種をすることは、最良の方法ではありません。追加接種が必要になったときのために準備はしておき、まずは全員が接種することが、脅威となる新たな変異株の出現を抑制することになります。

新型コロナワクチンの投与開始初期の重点的調査（コホート調査）（代表研究者 伊藤澄信）（2021）。

Puranik A., et al. Comparison of two highly-effective mRNA vaccines for COVID-19 during periods of Alpha and Delta variant prevalence. medRxiv 2021.08.21.261707 (2021).

(2021/08/20)

